

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 竹内はるか著『東西アクセント境界地帯方言の変化：三重県北中部』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸江, 信介, Kishie, Shinsuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000537

〔書評〕

竹内はるか著

『東西アクセント境界地帯方言の変化』

— 三重県北中部 —

岸江信介

一、はじめに

著者の竹内はるか氏は、三重県鈴鹿市のお生まれで、大学を卒業するまでこの土地で過ごされた。恐らく早い時期から鈴鹿市のアクセントが人によって異なることに気づいておられ、どのような違いがあるのか、さらにこの差がどのような理由によるものなのかを解明すべく、アクセント研究の道へ進まれたのではないかと思う。

本書では、同一地域で生育した多人数の話者を調査対象にしているが、単に世代的なアクセント変化の特徴を見出そうとし

ただけではなく、アクセントの体系的研究の視点からアクセントの記述的研究を試みたものと述べられている。したがってアクセント変化といった場合、個別語彙レベルのアクセント変化ではないのもちろんのこと、類別体系の変化など、部分的な体系レベルでの変化でもなく、アクセント体系そのものの変化を指している。このため、全体を通じて、常にアクセント体系を念頭においた記述に徹するという方針で臨んでおられる。

二、鈴鹿市におけるアクセント体系の変化

本書で最も興味深く思われるのは、京都市アクセントと同様の京阪式アクセント(中央式アクセントと呼ばれることもある)である鈴鹿市のアクセントに体系的な変化が起きているという指摘を行った点である。近畿地方各地でこれまでに行われてきた京阪式アクセントの調査研究では2拍名詞第5類の語末にみられる拍内下降の消失、同じく2拍名詞第4類と第5類の統合等といった類別体系内にみられる、部分的な変化を指摘したものはあったものの、京阪式アクセントが行われる近畿地方の都市や集落で京阪式アクセント体系自体に変化が起き、東京式(共通語)アクセント体系が新たに誕生としたという報告はこれま

でなく、この点で高く評価できる。

同種のアクセント体系の変化は、愛媛県松山市においても起きており、秋山英治氏によっていち早く報告されている（秋山英治（二〇一七）『愛媛県中予方言のアクセントと共通語のアクセント』おうふう）。いずれにせよ、京阪式アクセント地域において東京式アクセントへの体系変化が起きるといふ報告が秋山氏、竹内氏と相次いだことは、今後、近畿地方や四国地方各地で行われる京阪式アクセント地域にも同様の変化が及ぶ可能性を示唆するものといえるかもしれない。

多人数話者を対象とした鈴鹿市でのアクセント調査を通じ、竹内氏は体系的に京阪式アクセントか東京式アクセントかを決める指標となる、式の対立の有無をはじめ、2拍名詞の所属語彙と型の対応、3拍以上の語に尾高型が観察されるかどうかの3点に注目し、伝統タイプ、ニュータイプ、混合タイプの3種類のタイプに分類した。伝統タイプは、旧来同様の京阪式アクセント体系であるのに対し、ニュータイプは式の対立がない、東京式アクセント体系に似たタイプである。また、混合タイプは前二者の中間的なタイプだとし、全体として式の対立はあまいであるとしている。

鈴鹿市が三重県北部に位置し、同市のアクセントは「東西ア

クセント境界地帯」に含まれているという点から体系的変化が進行中であるとしてもさほど不思議ではない。また、このような変化が、近畿地方のいずれかの地で将来起きるであろうということも予想していた研究者もいたはずである。

今から10年以上前になるが、愛知県名古屋から三重県伊勢市間で方言グロットグラム（地理×世代）調査を行い、その際、アクセント調査も簡易的なものであったが、実施した。この時、三重県側の桑名市や四日市市の若年層では、まさにこの鈴鹿市のニュータイプに近い東京式アクセントで読み上げる者が少なからずいた。一方でこれらの都市では同じ若年層であるのに京阪式アクセントで読み上げる者もいた。東京式アクセントに近い形で読み上げる話者に対しては、ふだんくつろいだ場面で、例えば家族や友達と話しているように読んでほしいと再三、指示したが、京阪式に改めて読む話者はほとんどいなかった。アクセントを場面に応じて使い分けるといふ、アクセント使用に関する意識調査の結果報告が本書の第8章にある（詳細は後述する）が、使い分けるといふ段階を超えてしまっていて東京式アクセント体系へとすでに変化していると思われる話者がいたのである。本書、69頁の表31の状況から判断して、鈴鹿市の場合も桑名市や四日市市の場合とほぼ同じ結果ではなかったかと

思う。このような状況からいえることは、本書の指摘どおり、京阪式から東京式へのアクセント変化が確実に進行しているということになるのである。ただ、ニュータイプの話者はくつろいだ場面での自然談話においても、京阪式アクセント的な要素がまったく観察されることはなかったのかどうか、換言すると、日常の会話においても、東京式アクセントしか現われないのかどうかという点を知りたいところではある。

鈴鹿市の調査で、もっとも多く現われたタイプは37名中23名もいた混合タイプだとしている。ところで第2章第4節では、混合タイプについて詳しく述べられているが、記述するにあたって残念ながら若干、ミスや不適切な記述がみられる。まず、2拍名詞に関して63頁7行目で本文が切れており、8行目以降説明があるはずであるが、消えている。また、同頁6行目の「1986年生まれ」は「1985年生」の間違いであろう。さらに、27頁の表3とも関係するが、64頁の3拍名詞および4拍名詞に関する説明として、3拍名詞の音韻論的解釈による型が「○○○／、／○○○／、／○○○／、／○○○／、／○○○／、／○○○／」の七つ、4拍名詞では「○○○／、／○○○／、／○○○／、／○○○／、／○○○／、／○○○／、／○○○／、／○○○／」の八つの型があると述べている。3拍名詞では七つの型のうち、五つは先頭に「／・／／」といった高起式・低起式を表す記号が付けられているが、「○○○／、／○○○／」には付されていない。4拍名詞も同様に「○○○／、／○○○／、／○○○／」には式を示す記号が付されていない。となると、これらは高起式でもなければ低起式でもないため、これらに属さない別の式として捉えられてしまうことになる。

3拍・4拍の名詞にそれぞれ現われる、これらの型はいずれも語頭が高でも低でも許容されるという理由で加えられているが、これに該当する「二人」「庭師」(以上3拍)、「朝顔」「折り紙」(以上4拍)にコノを付けて「コノフタ」リガ、「コノアサ」ガオガだとすれば「コノ」カラ「スガ」(烏)や「コノ」ケイ「サツガ」(警察)と対立するのでいづれも高起式となる。語頭(句頭)が高いか否かは問題ではなく、句中でどう接続しているかを確認することで式の対立の有無を見極めることができたはずである。

第3章、第4章での記述によると、混合タイプでは動詞で式の対立があるが、名詞の場合はこの対立があいまいになっていると述べられている。名詞の場合はユレが激しいが、混合タイプの23名の中には名詞の場合であっても式の対立が明瞭なアク

セント体系を有する者が割合は少ないとしてもいるはずである。混合タイプ¹⁾の音韻論的解釈を示す場合、式の対立が明瞭な話者とあいまいな話者とに分けて各々記述すべきではなかったかと思う。京阪式アクセント体系を有しているか、あるいは東京式アクセント体系を有しているか、個々に判断することはさほど難しいことではない。

第4章では15名の鈴鹿市生え抜き話者の2拍語、3拍語の調査結果が各表に示されているが、特に2拍名詞の各類のユレの激しさに驚かされた。この変化は必ずしも若い人に集中しているわけではなく、一九三〇年代生まれの、高齢の世代にも見られるようである。この点で、鈴鹿市で東京アクセント化が起きたのは最近になっての話ではないということなのであろう。

第7章では、三重県北中部の若年層のアクセントの現在の実態を各地域での多人数調査の結果をもとに整理し、まとめている。名古屋市に近い桑名市での東京式アクセント化が着実に進んでおり、個人差がみられなくなったとしている。四日市市・鈴鹿市・津市では同様に東京式アクセント化が進んでいるものの、個人差が認められるとしている。また、津市よりも南に位置する松阪市や伊勢市では京都市同様、東京式アクセント化が見られないと報告しており、地域差の現状を正確に報告して

いるものと評価できる。

第8章では、アクセントに対する使い分けの実態を意識調査として三重県北中部の高校生^{315名}の回答をもとに分析を行った。ここで興味深く思われたのは話し相手によってアクセントを使い分けるといふ回答が非常に多いということであった。友達や地元のお年寄りには「京都や大阪などの関西アクセント」、先生には「東京アクセント（共通語的な発音）」で話すという意識が高く、コードスイッチングの実態が報告されている。京都市や大阪市をはじめとした近畿中央部でも東京式アクセントで話すことができる若者は多いと思われるが、まだ大半の地域ではこのような使い分けの段階には達していない、話し相手に関係なく、いかなる場面でも京阪アクセント優先で話すことが多いのではないかと思われる。

一方、三重県北中部の高校生のアクセントの使い分け意識はすでにすっかり定着しているように見受けられる。このことは、当該地域において京阪式アクセントから東京式アクセントへと体系系そのものが変化しているという事実を裏付ける根拠にもなるといえるであろう。

京阪式アクセント地域に東京式アクセントへの変化が徐々に浸透し、地域アクセントが変貌を遂げつつあるという報告は単

に三重県北中部で起きている現象の指摘のみにとどまらず、京阪式アクセントを研究する上で重要な意味を持つ成果であるといっても過言ではない。

(A5判、二五六頁、おうふう、二〇一九年二月発行、
一一〇〇〇円＋税)